

いじめ加害をめぐる認識の相違と対応の比較研究
- 大学生、父親、母親間の比較検討 -

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会行動クラスター
室 智子

いじめ問題を被害者の視点から調査するのみでは、新たな支援方法を模索することは難しい。本研究は、大学生と、思春期・青年期に達した子どもを一人でも持つ父親、母親を対象に、いじめ加害者の視点から、いじめ加害行動の認識の相違と、我が子がいじめ加害者の場合の親の対応について検討した。

調査1「いじめ加害をめぐる認識の相違と対応の比較研究」では、筆者が作成した質問紙を実施した。質問紙の結果、いじめ加害行動の認識は、父親が加害の認識が低く、母親が加害行動に対して最も敏感であった。いじめ加害者への対応については、大学生は親にあまり関わって欲しくないという結果であった。しかし父親は「母親の子育てに責任がある」と考える傾向を若干示したが、父母ともに積極的に我が子の問題に取り組むという姿勢を示した。また父母は、子どもの成長のためにいじめは必要であると回答した平均値が高かったことに注目した。親は、いじめは無いに越した事はないが、被害・加害に関係なくいじめを経験した場合、子どもの成長のために必要であったと考えるのではないだろうか。ただし、親と大学生との間にはいじめ加害への認識に差異があり、親が経験しておく方が良いと述べるいじめの程度は、いかなるものか考える必要がある。

調査2「いじめ経験者の『いじめへの考え』を聞く」では、大学生、母親を対象に「いじめ加害の内容」などを尋ねた。調査方法は面接して、会話内容を記録した。調査の結果、対象者は、一般的に軽度と見なされるいじめを行っていた人が多く、結果に偏りが生じた。いじめ加害行為の最中は、家庭内外にストレスを感じる大学生はいなかった。また、親自身が子どもの時に経験したいじめや親子関係などが、我が子のいじめ問題への対応に影響しやすく、その結果、子どものいじめ問題に柔軟に対応することが困難な場合がある。被害、加害に関わらず、子どものいじめ問題に取り組む時、親がより効果的に子どもに対して働きかけが行えるように、親をサポートする環境作りが必要であると言えよう。

特に現代社会においては、「いじめ」と「遊び」「冗談」の境目が分かりにくく、親の介入の仕方によっては、我が子がいじめられる場合もある。調査全体を通して、当然母親もだが、特に父親は成長と共に我が子と「付かず離れず」の信頼関係を築いていく必要があると言えそうだ。また、夫婦間でいじめ加害への認識や対応に違いがあることを相互理解しておくことによって、いじめ加害をしていた場合でも、夫婦で協力して問題に対応することができ、子どもも親の言葉に耳を傾け、早期に加害行動をやめると考えられる。